

### 経営者への活きた言葉

#### 余裕が出てきた時期こそ、リーダーとして教養を身につける 吉原 毅(城南信用金庫・理事長)

1. 2014年、日本の景気は緩やかな回復が続いている。「さあ、巻き返そう」と売上高や利益率の向上に躍起になっている経営者も多いことだろう。だが、私はあえて言いたい。「こういう余裕が出てきた時期だからこそ、トップは経営だけにのめり込まず、リーダーとしての教養を身につける時間を確保すべきだ」と。
2. 経営者に必要な教養は、政治、経済、金融など、ビジネスに関する知識だけではない。音楽や文芸など様々な分野に興味を持つことも必要だ。一見、雑学なようだがそうではない。目的は、経営者としての視野を広げることだ。視野が狭く経営のことしか頭にないと経営者は、人間的魅力に欠け、カネでしか組織をまとめられない。豪邸を建てたり、高級車に乗り、金儲けに猛進するだけ。そんな人物が組織のトップだと、働く社員も昇給と昇進しか考えないようになる。
3. この手の会社は、いざ経営環境が悪化するとあっという間に組織がバラバラになってしまう。日頃から顧客を軽視し、ビジネスの論理最優先で会社を動かしているから、消費者からもすぐに見放される。だから余力が生まれつつある今のような時期こそトップは経営だけにのめり込まず、リーダーのあるべき姿や自社の存在意義を考えるべきだ。そうすれば、次に景気が厳しくなった時も、会社は生き残れる確率が高まる。

(参考:「日経ビジネス」2014年1月27日号)

### 新規成長分野

#### 黒字経営の継続は5S(農業)

1. 田中進さん(1972年生まれ)は大学卒業後、旧東海銀行に就職し法人営業を長く経験した。営業成績はトップクラス。外資系のブルデンシャル生命保険に移って、さらに営業力は増した。その後、山梨県の実家が農業だったため、2004年にトマトなどを栽培するサラダボウルを設立。元銀行マンが経営する農業法人には人材が次々と集まってくる。
2. だが、事業運営の仕組み作りや人材育成は理想どおりには進まない。「俺についてこられないのなら辞めろ」。そう思っていたが、ある日、目が覚めた。立て直しの基本原則は整理、整頓、清掃、清潔、しつけの5S活動だった。勉強会の開催や、スタッフに作業の問題点、改善点を記してもらった「作業日報」の導入など、特にしつけには気を配った。日頃の業務、事業計画は「見える化」して、みんなで共有している。創業以来9年間黒字経営を続けている。

(参考:「週刊東洋経済」:2014年2月8日号)